



# 馬の骨



雑把

水着姿の絵里子は飛び込み岩の天辺から、なんの躊躇も無く十数メートル下の海を目がけ、空中に身を躍らせた。磔刑のポーズのまま足先から着水して、海面に飛沫が上がった。

それを見て地元ハワイの子供らが、やんやの喝采を浴びせる。

彼女ハ、オレタチノ仲間ダ。

飛び込み岩を中心としたこのビーチは夏の間、彼等ロコ（地元育ち）の子供たちの占有地だ。冬季はビッグウェイブが到来してサーファーたちが押し寄せるが、今は真夏。オアフ島ノースショアの、観光客もまばらなビーチ。太陽とロコチルドレンの喚声が季節を支配している。

絵里子の後を、蒔かれた種みたいにバラバラと子供らが岩から飛び込む。浮かび上がってきては、また岩によじ登っていく。そしてまた飛び込む。日がな一日、これを繰り返す。

やがて時計が午後三時を回った。

絵里子とその連れ合いの中年男と、もうひとり六十年配の男の三人組は、レジャーシートやら敷いた砂地の陣地を引き払い、車に乗り込んだ。夕刻を目指してワイキキに戻る。

「しかし、絵里子さん。大した勇気だ。あんな目もくらむ高さから」

銀髪オールバックで、鼻の下に白い髭を蓄えた年長の浅賀という男が言った。

ハンドルを握ってキーを回しながら、

「浜から見上げて、あの岩は相当な高さですよ。登って下を覗いたら、私なんぞ足が震えて座り込むのがオチだ」

三十前半に見える絵里子は、後部座席でサングラスの奥から外の光を眺めて、

「なんてこと無いんです」

と、他人事みたいに呟く。それから、サングラスを一度膝に置き、パーマのきついウェーブが海水を吸って強調された肩までの髪を、タオルで手荒に拭き、

「やってみれば、なんてこと無いんです。いろいろ想像したら怖くなって、なにも出来ませんから」

細巻のタバコに火を点けた。

「その通り。へたな想像力は実行力の敵。卓見です」

と、浅賀が賛同した。

絵里子の連れの中年男は堀江という男。彼女の隣に座り無言のまま。歳は四十代半ば。ポロシャツにスラックスのその体型は、Mサイズの見本のようなシルエット。始終、足を組み替えてどこか落ち着かない。

後部座席の絵里子と堀江は、朝霞と昨夕サンセットクルーズで初めて会った仲だ。船内で、たまさか食事の席が隣り合わせだった。酔いも手伝って、ハワイに精通しているという紳士然とした浅賀の誘いに、カップル二人が合意して今日のドライブとなった。

浅賀は、

「ハワイに来ると、新たな遊び友達を探しに、ついクルーズに乗船してしまうんです。一種のナンパですか」

そう言って、笑い、

「年寄りの困った趣味です」

そして浅賀はノースショアへのドライブを提案した。その代わりに自称年寄りの気まぐれに付き合ってくれば、車も出すし食事代などすべて自分が持つ、と。カップル二人は旅の開放感も相俟って、ひょいとその話に乗った。

日本にいる間はハワイ現地の知人に預けているという浅賀のキャディラックは、視界いっぱい広がるパイナップル畑を悠然と進み、やがてフリーウェイに入った。

ハワイのフリーウェイを、猛スピードで飛ばす車はまずいない。流れは緩い。

浅賀がコイーバのシガリ口を啜えてくゆらしながら、

「三年前家内が亡くなってから、止めていたタバコをまた吸い始めてしまいました」

更に加えて、

「ご主人はもともと、タバコはお吸いにならないんですか？」

そう堀江に聞いた。

「浅賀さん。私たち夫婦ではありませんので」

絵里子が瞬時に割って入って、さらりと否定した。

「そうだ、恋人同士ですね。なんと言うか、便宜上と言うか如何なる習慣か、ついそんな呼び方をしてしまうんです。すみません」

と、浅賀。運転しながら僅かにぺこりと頭を下げる。

「確かに僕らも、やたらに若くはないし」

と、堀江が口を開いた。

「微妙な年代ですから」

そう言い添えて、足を組み替えた。

「微妙な関係って言葉ならあるけど、微妙な年代って何よ。おかしいこと言うわね、あなたって」

絵里子が角を出した。

「まあ、そう嘔みつくなよ」

そう言って、堀江は渋い顔になった。

絵里子は心身ともに少しばかり負担が掛かる手術を受けた後だった。

車はフリーウェイを降り、しばらくダウンタウンを流すと、一軒の寿司レストランのパーキングに繋がれた。浅賀行きつけの店だ。

入店すると日系の若い女性ホール係が笑顔で飛んできた。三人は日米の俳優、ミュージシャン、スポーツ選手たちの歴訪写真パネルを横目に、テーブル席に通された。郊外型レストランといった広さで、まだ浅い時間なので客はポツリポツリとそこそこに点在するのみ。

赤いアロハ姿の浅賀が他の二人に断って席を離れ、カウンター席に歩み寄った。中の職人に直接、自分のリクエストと、プラスおまかせでどんどん運ぶように指示した。それから、ひとりカウンターで寿司を摘んでいた若い口コの男が旧知の間柄だったらしく、親しげに二三言交わしてから席に戻ってきた。ジャッキー・チェンの鼻が胡坐をかいたような容貌のその口コは、三人に向かってビールジョッキを掲げて挨拶を試みさせた。太く頑丈そうな首さしが目立つ。

「さあ、底が抜けるまで飲んで食べましょう」

浅賀の一声で食事がスタートした。

次々に刺身やオリジナルのなににロールといった巻き物が、テーブルに運ばれてきた。

「寿司屋ですが、お望みならステーキも出てきます。結構これがイケるんですよ」

浅賀がそう言って、目尻の皺を総動員して微笑った。

彼のハワイでの宿泊先は、ホテルではなくワイキキビーチの近くに所有しているコンドミニウム。クルーザーも持って

いると言う。

「たまたま商売が当たってるんです。それだけです」

浅賀はそう言ってから、

「お金が一番ではないですが、年寄りに貧乏は堪えます。お金の価値は、その程度のものです」

絵里子は、その言を受けて、

「あたしも、貧乏は嫌い」

ひと息置いて、

「貧乏人は、もっと嫌い」

ビールをひと息飲んで、つぶれそうなタバコのパッケージから振れた細巻きを一本抜き出し啜えた。

「問題発言だな」

と、堀江もビールをひと口。

浅賀は、さも可笑しそうに笑い、

「絵里子さんは、ストレートですね。でも正直私も、貧乏が好きな女性というのは、あまり好きなタイプではありませんね。もっとも、滅多にそういう方にお目にかかった経験が無いので」

と、今度はなにか思い出したように、むせるように笑った。

やがて、白ワインが調子よく三本倒れていった。

浅賀は少しよいが回ったか、紅潮した顔で、

「今、思い出した話があるので聞いてください」

と、改まり、

「家内の告別式の話ですが、悲しい話ではありません。ただどこか得心がいかないのが記憶に留まっているんですが」

そう前置きしてから、浅賀はテーブル前方に座った二人に喋り出した。

「あの日、斎場で彼女の遺体が焼かれた後、待合室で待っていた私ども遺族が呼ばれました。窯の扉が何枚もあるホールに入りますと、焦げっぽい臭いを立てる彼女の全身の骨が、ストレッチャーみたいなものに乗せられて既にその場所がありました。腕章を巻いた職員らしい係りの男が一例して私を喪主と確認します」

柔和にも鋭利にも変化しそうな三角形の眼差しで堀江を見て、次に絵里子を見る。

「続いてその係りの男が、儀礼的に彼女の骨を教材に解剖学か骨相学の講義をやるのが常です。ご存知でしょうか？ 喉仏はこの部分が仏様に見えるとかどうだとか。私にとってそんなものはテキ屋の口上と同じです。私は案の定の講釈を始めたその男を、話は要らないからとっとと彼女の骨を壺に収めてくれ、と大きな声で制していました。息子夫婦も私や彼女の親族もみな、ビックリした様子でしたが、でも誰も私の意志には口を挟みませんでした。私は彼女が裸のまま晒しものにされているような気分にも襲われただけです」

絵里子は浅賀の表情をまっすぐ見つめていた。彼は先を続けた。

「係りの男は私の意志に従い、講釈を省略して顔色ひとつ変えずに骨壺にすべての骨を収めました。そういった態度も、まあ商売柄でしょうね。こうしたケースもたまにあるのかもしれませんが」

シガリ口を指に挟むが火は点けずに、

「それより私が不可解に感じたのは、骨壺に収められた骨量です。小柄なうえ死因がガンだったので、少なめな骨量を想像していたのに、詰められた骨は壺の蓋があわや嵌らないほどの量があったんです」

二人の反応を伺うような目線を送った。

「そのとき私の頭に浮かんだのは、焼き上がった彼女の骨のあまりの少なさに、サービスで馬の骨でも混ぜたんだはないか、という莫迦げた憶測でした。

ようやくシガリ口に点火する。

「斎場の近くには競馬場があるんです。それからの連想でしょうか。実際、非現実的な想像です。でも未だに、腑に落ちたわけではないんです」

そこまで喋り間を置くと、ワインを一本追加オーダーした。

「歳を取るとどうも凶々しくなって、なんでも話のタネです」

おどけるように唇をすぼめ、ほほおと微笑った。

小一時間のうちに、店が次第に混み始めていた。人の気配が濃くなってきた。

テーブルに肘をついて、組んだ拝み手の上に顎を乗せた絵里子は、

「興味深い話ですよ」

紫外線とアルコールのまだら焼けの顔でそう言い、さらに、

「結局はどこかの馬の骨なんですよ、あたしたち全員。あれこれ思い悩むような贅沢な存在じゃないんですよ。浅賀さんの話の本筋とは違うんですけど、そんなこと考えちゃいました」

それを聞いた浅賀は、

「なかなか哲学的な解釈を頂いて、有難うございます」

絵里子に芝居がかった一礼をした。

「誰か別の人の骨だったとか？」

と、堀江。

浅賀は、

「そんなことが起きるのは、どんなケースですか？」

そう問われた堀江は思いつき以上の想像は出来ず押し黙った。

新しいワインボトルが届いた。

「ちょっと、化粧を直して来ます」

そう言って、絵里子がポーチを持って席を立った。

首を捻ってトイレに向かう彼女の姿を見送ってから、浅賀は堀江に向き直り、

「ようやくゲームが動きましたね、堀江さん」

トーンを落として囁いた。たっぷりした涙袋の上の目が充血している。

「ゲーム？」

浅賀は話の先を急ぐふうで、

「彼女はあなたの人生のお荷物になってますね。それも重荷でしょう」

と断言する。

「ここでカタをつけませんか。一気に」

「なにを言い出すんですか」

堀江には浅賀の言葉の意味がさっぱり分からない。

「はっきり申し上げて、あなた方は健全なお付き合いではない。清算しなくてはいけない。乗り越しが長引かないうちに。私がアシストしましょう」

そこまで言うと浅賀は、トイレの方角をちらり見やった。

「僕らの関係は、僕らの問題です」

堀江は事実関係を認めながらも、そう反駁した。

「不快に感じるのは当然です」

と、浅賀。

「でも、清算は必要です。さっきカウンター席から挨拶をよこした若い口コはシャークと呼ばれる掃除屋です。掃除屋というのは、殺し屋のことです」

早口でさらりと言った。絵里子が席に戻るまでの時間を押し量るように。なおも続けて、

「あなたにとっては、これまでお付き合いの無かった人種でしょう。でも歴史的にもかなり古くからある商売のひとつです。彼等も普通に街を歩いています」

堀江はカウンターに目をやったが、先ほどの口コはおらず、白人の夫婦らしい老カップルが大袈裟な身振りではしゃいでいた。

「性質の悪い冗談だ」

堀江は確かに不快だった。無理に笑い飛ばそうと思ったが、不完全な表情に終わった。昨日知り合ったばかりの人間同士だったことが、俄かに思い起こされた。ひと皮剥けばどんな性情を内に秘めた人間か、分かったものではないのだ。急に薄気味悪くなった。

浅賀は堀江から目を外さずに、

「冗談でも結構です。ならば、冗談だと思って了解の返事を下さい。彼女を手に掛けることに。彼女自身が言うとおりの、なんてことないですよ。みんな馬の骨です。あなたはこういうことに、ただ慣れていないだけです。彼女が戻る前にもうひとつだけ」

人差し指を立てて、

「私の家内もシャークが掃除したんです。私が彼に依頼した理由は、家内が不健全な真似をしたからです」

そして、ものすごい勢いでグラスにワインを注いだ。

堀江はこの場をどう納めるか、抜け道の見つからないまま、始終足を組み替えた。

「ゲームなんですよ」

と、浅賀。さらに、

「もしあなたが先にトイレに立つなり何らかの理由で席を離れていたら、この話は逆に彼女に持ちかけるルールだったんです。彼女ならどういう返事をするでしょう。それよりもしかしたら彼女なら私を殺すかもしれませんね。あなたを守るために……」

そして、喉がごろごろ鳴るような妙な笑い声を立てた。

「あなたには私と刺し違える勇気がありますか？」

と、さらに言い募った。

「もう、デタラメは止しませんか」

堀江は内心必死の思いで言った。

「デタラメでも作り話でも構いません。私はこれからも自分の決めたルールに沿って生きるだけです。困った年寄りです」

浅賀は終始、押さえた調子のまま、

「絵里子さんが戻ってきます。もう三十分ほど時間を差し上げましょう。私が彼女側でプレイ出来ることを、お忘れなく」

客たちのざわめきを縫って、絵里子がテーブルに戻ってきた。

堀江を見て絵里子は、

「怖い顔して、どうしたの」

そう訊いてから着席した。

浅賀が、あっという間に快活さを取り戻し、

「ホームシックかもしれません」

茶化した。それから、

「もう一度、絵里子さんの高飛込みを見てみたいもんです」

金無垢の腕時計を覗いて、堀江に一瞥をくれると、

「まだ六時半ですか」

カウントダウンを始めた。